

「昭和史」授業実践報告

—生徒は「戦争」にどのように取り組んだか—

神奈川総合高校 坂井久能

はじめに

戦後六十三年経過した。高校生は平成生まれとなり、教員も戦後生まれであるとともに、昨年から団塊の世代の退職が始まった。家庭は既に戦争体験の語り継ぎの場ではなくなり、生徒に「戦争」を理解させることがいよいよ難しい状況になっている。しかし、このような状況こそ、「戦争」をいかに学習させ、平和と民主主義の意識を高め、歴史認識を育てていくか、ということが歴史教育の大きな課題といえるであろう。

本校は、県下で初めての単位制普通科高校として平成七（一九九五）年に設立された学校で、創立以来学校設定科目「昭和史」を開設し、この問題に取り組んできた。但し、学校や教科として教材を作成したりシラバスをつくってきたわけではない。その時々を担当教員の工夫により、教材の準備や授業計画が立てられてきたのである。以下は、この二年間における「昭和史」の授業実践報告である。

一 学習の概要

1 「昭和史」の概要

- ①科目名 昭和史 類型科目（自由選択科目） 通年二単位
- ②担当者 坂井久能（地歴科）
- ③使用学習室 人文学習室（9階）

④時間 木曜1限（9：00～10：30）、90分授業

⑤履修生徒 11名（卒業年次生。内1名は神奈川工業高校連携生）

⑥使用教材 自主教材及び生徒作成プリント

⑦学習目標 昭和史を平成の現在につらなる歴史としてとらえ、

現代史的な視点で歴史を考察する。特に昭和史は戦争と深くかかわった時代であることから、戦争と平和についての理解と思索を深め、国際社会に生きる日本人としての資質を高める。（シラバスより）

2 生徒の実態と学習のねらい

生徒は、戦争世代の孫か曾孫となり、戦争に対する実感がなく、一九八〇年代後半から始まったゲーム世代のなかで、その疑似戦争体験やアニメの世界での「戦争」が刷り込まれているのではないかと思われる。また小中学校における平和教育の中で、「戦争」はやってはいけないものという結論のみを把握し、怖いもの・恐ろしいものとして、実態を直視することには身をひいてしまっている生徒が多い。そのような生徒に、なぜ戦争はいけないのかを問いかける。原爆投下を容認している人々が多くいることを問いかける。戦争の実態を見つめ、いけないものと実感した時初めて平和への思いが強くなると思うからである。

「昭和史」は、本校開校準備委員会が作成した指導計画に「昭和の歴史を学ぶことにより、戦争と平和の歴史に対しての理解を深め、平和と軍備縮小へ進むべき道を考える」とあり、戦争と平和について理解と思索を深めることが、学習のねらいとされてきた。

3 使用教材等

「戦争」は、その事実を覚え知識を増やしても、それだけでは理解することは難しい。「南京事件」の用語を覚えたところで殆ど意味がないように、「昭和史」の授業も事実の羅列では学習の成果が得られないのである。そこで、かつて家庭が行っていた戦争体験者の語りを学校で行い、視聴覚教材や実物資料を提示し、戦争遺跡を調査することなどを通して、戦争についての思索を深め、或いは戦争を追体験するような工夫が必要であろう。

4 学習計画と学習内容、学習形態

(1) 学習計画 下記の通り（前期のみ）

(2) 学習内容 「学習計画」に示した通り、前期に昭和戦前期、後期に昭和戦後期の諸問題を取り上げた。前期は取り上げる各テーマの大枠を担当者が決め、後期は、事前に受講者から興味・関心あるテーマを出してもらい、担当者調整しながらテーマを決定した。生徒は、各テーマの大枠内で調べ発表し討論する学習を展開した。

(3) 学習形態 平時の学習、校外学習、戦争体験の聞き取り学習、課外学習を行った。

5 平時の学習

- (1) レクチャア：プリントやビデオ・実物資料を使つての講義。主に概論や問題提起、議論の整理など、最小限に止めた。
- (2) 共同討議：共通のテーマについて全員がレジユメを提出し、各自5分程度発表して討議する。

平成20年度前期

「昭和史」学習計画

担当・坂井 2008.4.17

回	月	日	学習内容	(発表者)
1	4	17	①昭和史の学習について ②昭和史概観	(坂井)
2	4	24	①戦争の概観。 ②兵士となり、戦場で戦い、戦死すること。 ③特攻とは ④実物資料を見る	(坂井)
3	5	8	特攻史料を読む(関口家文書) 各自分担当した史料を入力・プリントして持ち寄り、わかったことを発表する。	(全員)
4	5	15	共同討議「特攻兵士の遺書を読む」 事前に提示した遺書の感想をレポートし、討議。『きけわだつみのこえ』(岩波文庫)など	(全員)
5	5	22	①分担レポート「恐慌・協調外交と大正デモクラシーの余韻」 大正デモクラシーの余韻。モボ・モガ。うち続く恐慌。政党政治の慣行。治安維持法の制定・改定。 ②校外学習(5/31)について	(1名) (坂井)
6	5	29	休講(校外学習の振り替え) 施設見学：5月31日<土>を予定。昭和館・靖国神社遊就館・千鳥ヶ淵戦没者墓苑等	
7	6	12	共同討議「満州国は王道楽土たりえたか」 満州事変はなぜ起こったのか。満州国は日本の傀儡か。満州移民と残留孤児	(全員)
8	6	19	①分担レポート「自由の圧迫、思想統制」 治安維持法の制定・改定。国民精神作興・国民精神総動員運動。上智大学事件・滝川事件・天皇機関説問題。教育の統制など。 ②分担レポート「南京大虐殺とその論点」	(1名) (1名)
9	6	26	分担レポート「日中戦争・南京大虐殺とその論点」 日中戦争はなぜ始まったのか。南京大虐殺の惨状と論点。七三一部隊の人体実験や戦時下の虐殺事件など	(2名)
10	7	3	①分担レポート「大東亜共栄圏は幻か」 太平洋戦争はなぜ始まったのか。自存自衛が侵略か。大東亜共栄圏構想とは。日本の占領地支配など	(2名)
11	7	10	分担レポート「戦争の惨状」 硫黄島の戦い・沖縄戦などの惨状。玉砕、戦陣訓と捕虜	(2名)
12	7	17	分担レポート「戦時下の国民生活」 国民生活の圧迫。総力戦体制と徴用。学校教育の破壊と勤労動員など	(2名)
13	7	24	共同討議「空襲・原爆の惨状と是非」 空襲・原爆の惨状。なぜ一般市民をねらうのか。原爆の是非など	(全員)
13	8	28	①期の総括、後期の学習について ②期末テスト	(全員)

前期には「特攻兵士の遺書を読む」「満州国は王道楽土たりえたか」「空襲・原爆の惨状と是非」の三テーマを設定し、テーマに沿って生徒は各自の切り口で発表し、討議した。例えば「満州国」については次のような発表があった。

・満州事変（リットン調査団について） ・満州国の国旗
・南満州鉄道株式会社 ・満州事変は侵略か

・満州事変の勃発とマスメディア ・満州国は王道楽土たりえたか
・満州事変と石原莞爾 ・満州移民について ・満州移民
・軍の武力による王道楽土計画 ・日本の満州国

質疑の後、満州事変は自衛か侵略か、事変の意図は、満州国は日本の傀儡か、満州国は王道楽土たりえたのか、などを議論した。

(3) 分担レポート：分担したテーマについて、毎回二名程度、レジュメを提出し、一人10～15分程度発表して討議した。

例えば第九回授業のテーマ「日中戦争・南京大虐殺とその論点」では、「南京大虐殺」「日中戦争 日本側の目的・名目とは」と題した二人の発表があり、虐殺の実態や日中戦争の「目的」がどのように形成され変化していったのか、という報告があった。発表後に「虐殺」とは何なのか、南京事件では何が問題とされたのか、虐殺はなぜおこったのか、などの議論があった。私は、「陸戦の法規慣例に関する条約」、「交戦法規ノ適用ニ関スル件次官通牒」（陸支密第一七七二号、昭和12年11月4日、防衛省防衛研究所蔵）の史料を提示し、戦時国際法の規定及び南京事件前の陸軍がその適用をどのように考えていたかについて考えさせた。

6 校外学習

5月31日（土）に昭和館・靖国神社・千鳥ヶ淵戦没者墓苑を訪れた。昭和館では、職員の解説で施設・展示品を見学し、当時の映像など豊富な視聴覚資料も短い時間ではあったが観ることができた。生徒の感想としては、実物資料を見ることで生活を実感し、理解を深めることができたというのが多い中で、次のようなものもあり、昭和館が抱えた課題の一端を指摘したものといえよう。

：私たちは、戦時下の人々がどのような食事をしてきたか、どのような服装をしていたかではなく、そこにどんな思想があったのか、それをどのように教えられてきたのが、人々はどのような社会のシステムに組み込まれていたのか、なぜそれに疑問を抱くことができなかったのか、という点、あるいは人間とは何なのかという根本的な問いを始めなければならぬはず。そして再び盲目にならないために、事実を学ぶ必要があるはず。

靖国神社では、戦死者を神として祀る独特の慰霊のシステムを学び、遊就館の豊富な実物資料を見学することがねらいであった。遊就館は、靖国神社独特の戦争観・歴史認識によって展示されているので、その展示のしかたや展示解説などを注意深く見るとともに、その歴史認識を見極めることも学習であることを指摘した。無名戦士の遺骨が納められている国立の千鳥ヶ淵戦没者墓苑も訪れた。

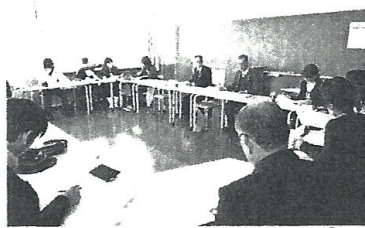
生徒は、靖国神社は皆初めてで、さまざまな偏見や先入観をもっていたようである。そのことは生徒の感想に、神主がやさしい「普通の人」だったことに驚いたとあったことや、「訪れるまでに感じていた恐怖感も少し軽くなった」と記されていることからもうかが

える。靖国神社は、特別な歴史を持った神社ではあるが、今や国民的な議論となつている靖国問題を学習する上で、このような偏見や先入観を持っていたのでは議論の基盤をなさない。また、靖国神社と千鳥ヶ淵戦没者墓苑をあわせ見学したことで、両者の違いを感じ取り、戦争をどのように捉え、戦死者の慰霊・供養をいかに考えるべきかの材料や思いを得たようである。この成果は、11月に連続二回行った靖国問題についての発表と討論の学習で発揮された。

7 戦争体験から学ぶ

外部の教育力を活用する学習として、「昭和史」の授業に過去2回松本俊夫氏を招いた。氏は、日中戦争・太平洋戦争を中国・ニューギニアで戦い、九死に一生を得て生還した方で、臨場感溢れる戦場での様子や、復員後の慰霊や戦友会の活動についての語りは、戦争への理解とともに、いかに語り継いでいくかということも含めて生徒に響くものがあった。

本年度は、特攻への取り組みのなかで、「伏龍特攻」の元隊員である門奈鷹一郎氏に、予科練から特攻に選抜されたことや、横須賀での凄惨な訓練の様子などを、文化祭の特別講演として語っていただいた。会場は約一四〇名の聴衆で満杯になる盛況であった。戦争体験者から話を聞くこ



松本俊夫氏 (07. 11. 9)



門奈鷹一郎氏 (08. 9. 28)

とが殆どなくなつてしまった現在、元特攻隊員のお話しは生徒に新鮮な驚きがあつたようだ。生徒の一人は次のような感想を記している。

私はこれまで隊員たちの「外面」しか見ていなかった、いや、見られなかった様に思います。本をいくら読んでも、映画やドラマをいくら見ても、実際の話に勝るものはなく、またそれらは必ずしも正確でないかもしれません。百聞は一見に如かず。門奈さんの話を通して、特攻隊員の本当の「内面」を知ることが出来たと思います。

8 課外学習—昭和史研究会の活動—

①「昭和史研究会」とは

講座「昭和史」の受講生と生徒有志を加えて「昭和史研究会」を組織した。会員は19名(受講生11+有志8名)である。会は、「昭和史」の教材として借用した実物資料を読み解き、「戦争」について考える研究会で、授業を補い発展的な学習を目指す課外学習の性格をもつものである。そのため、有志参加者には補講として授業で扱ったことを受講生および担当教員がレクチャとして、知識の共有化をはかり共通の基盤に立つて活動できるようにした。

②活動内容

昨年度の根岸家資料や本年度の関口家資料などの未公開資料を整理し読み込む中で、そこから何がわかるかを議論し、幾つかのテーマを設定して課題を探り、その研究成果を資料とともに文化祭に展示した。文化祭終了後は、活動を振り返り記録として『研究紀要・別冊』を発行した。

二 実物資料の使用

1 授業で実物資料を見る

実物資料として、昨年度は三浦郡葉山町の根岸房良氏の戦死資料をご遺族からお借りして、戦時下に一青年が兵士となり、戦場で戦い、戦死するという事とはどういふ事なのかを実物資料をたどるなかで考え、「戦争」とらえる学習を行った。根岸家資料は、房良氏の徴兵前から戦死後の靖国神社合祀までの約四〇〇点の膨大な資料である。授業では、その中の軍事郵便を取り上げて、戦場にある兵士と家族の思いを探る学習を行った。

本年度は、神風特攻隊で戦死した横須賀市の関口兄弟のご遺族から、特攻関係の資料をお借りして、特攻から「戦争」とらえる学習を行った。関口家資料は、日記や軍事郵便、短刀や勲章・位記、戦後の特攻をめぐる処理の資料など約一三〇点に及ぶ。授業では、三浦半島の特攻基地も取り上げて特攻の全体像を把握させ、関口家資料のコピーを一人数点配布してパソコン入力するなかでわかったことを発表するとともに、特攻の遺書を読んで討議した。

2 課外学習で実物資料を整理し読み解く

① 目録を作成する

資料調査の基本として、目録作成から始めた。ノートパソコンを教室に四〜五台並べ、資料束ごとに一つのパソコンで、基本的に2人組になって、予め担当者が用意した差出人・宛名・日付・形態や文書タイトル（または書き出し文）などの表の項目を読み込み、入力していった。私は、生徒の間を駆け回るようにして忙しかった。

② 文字資料をパソコン入力し、わかったことを発表する

目録作成後、生徒は資料のコピーを数点づつ受け取り、自宅でパソコン入力した。旧字体や崩し字などが多く、生徒が最も悪戦苦闘した作業だ。家族を巻き込んだ作業となり、家庭で戦争の話題が進んだようである。入力したものをプリントして皆に配り、わかったことを発表し、これを何度か繰り返し、全ての文字資料の入力を完成させた。

③ テーマを設定し、発表と討議を繰り返す

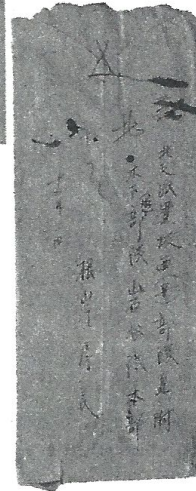
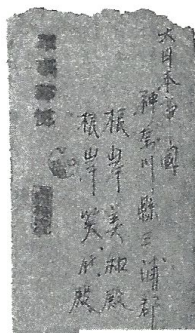
資料を読んでわかったことをもとに、幾つかのテーマを設定した。昨年度は「一兵士の一生から見た戦争」という全体のテーマのもとに15のテーマを設定し、今年度は「空と海の特攻から見た戦争」のもとに16のテーマを設定して、各自分担当した。生徒には、広く学問的な研究段階まで調べるよう指示し、調べ方を指導し、出典を明記することを伝えた。生徒は、テーマに関係する根岸家・関口家資料からわかったことをもとに、調べ学習を行った。研究書も足りない場合は私が紹介し、それらを読んでまとめた。まとめたものは研究会の場で発表し、指摘を受けては書き直し、また発表するということを繰り返した。この間に現地調査も行った。今年度は三浦半島の特攻を「海の特攻」として取り上げたことで、海龍・震洋・伏龍特攻を担当した生徒たちで三浦の特攻基地を踏査した。

④ 文化祭で展示する

発表を繰り返してできあがった各テーマを文化祭に掲示し、関係資料も並べた。文化祭当日は、来場者に説明し、戦争体験者から話せるだけ聞き取りを行うよう生徒は努めた。今年度は伏龍特攻隊員であった門奈鷹一郎氏の講演を設定したので、それが聞き取り学習の場となった。

3 実物資料から学ぶ

昨年度、日中戦争初期に戦死した根岸房良氏の戦死関係資料を、「昭和史」の授業で初めて見た生徒は、遺骨箱に入っていたという鉄の砲弾片を見て、これが顔を直撃して貫通し戦死した遺品であることを知り、衝撃を受



→ 根岸房良さんの書簡

← 砲弾片

けた。また、授業で読んだ軍事郵便のなかに、房良さんが幼い姪に宛てた手紙があり、中国人の民家に、その残していったものを使用して生活している様子や、民家を焼き払い逃げ出してきた中国人を殺害する様子をリアルに描写し、首をはねて「気持ちよかった」と書いている記述があり、皆衝撃を受けた。日中戦争が始まって最初に本土から出動した部隊の、中国民殺害の描写である。その衝撃が、根岸家文書をもっと調べてみようという原動力になった。



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9

昭和12. 12. 2 根岸房良さんの書簡 (軍事郵便)

…皆と一しよに前方の部落へ行ってみたが、敵らしい物は見へないので、三ツの部落を全部やきはらった。にげのこりの敵はやき打をくつて出て来たのを方端から射つた切つた。兄さんも軍刀で二人切

つた。気持ちよかった。(中略)

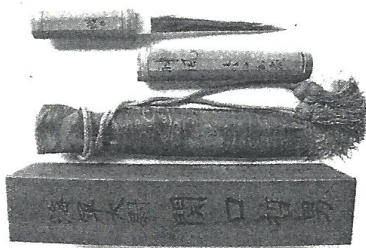
敵のやつらは家の中へにげこんだ。そして最早く土民の着物を着て日の丸の旗などもつて我々にぺこべ頭をさけて居る。着物の下に軍服を着て居るやつも有つたので、そんなやつは全部縄でしばつた。にげたり「テイコウ」するやつは方端から射つたり切たりした。其の時は俺ハ三人切つた。其の内でも一人は追げ後れて俺が家の中へ入つて行たらかくねる所をさがして居た。そして俺に見つかつたので青龍刀でむかつて来た。こちらは二人だ、何オコノチャンコロと戦つた。一人は銃で足か射つと同じに俺はクビを切つた。物すごく血が出た。

* 差別的な用語の表記については、歴史資料を忠実に記すことにとめたことによるものであり、差別を容認するものではない。

本年度の関口特攻資料も、弟の剛史さんは逗子開成中学校から先生の勧めで予科連に入隊し、抜群の成績であったことから、教官から特攻隊に選抜されたという。18歳で特攻死しており、高校生と同年代であることから、なぜこれ程に若い優秀な少年を死に追いやるのか、ということに生徒は疑問や怒りを覚えたようだ。

また、特攻は航空機とばかり思っていたら、海龍や震洋、もっと凄惨な伏龍特攻まであったことに驚き、しかもそれらの特攻は皆三浦半島に基地があったことを知った。その驚きから三浦の調査が行われ、予科練などの少年兵の制度についての調べも進められた。

昭和史研究会では、このように実物



特攻隊員に与えられた短刀

資料を通して「戦争」ととらえる学習を行った。文字資料は全てパソコン入力して読み込み、現地調査し、そこから何がわかるかを分析していくことと、それをもとに「戦争」について考えていくという学習である。両文書とも、私自身も殆ど読んでいない資料であったため、生徒と一緒に調べ、議論してきた。心がけてきたことは、資料からわかることとわからないことを区別させ、資料に忠実な解釈をさせたことである。そして、研究に踏み込んだからには、先人の研究と自身の考えを明確に区別し、出典を明記するようにさせたことである。歴史学という学問を生徒に垣間見させた活動であったといえる。

このような活動について、生徒は次のような感想を述べている。

文化祭に向けた根岸家文書への取り組みから得たものは、振り返ってみると予想以上に自分の中で大きなものとして残ったように思います。まず、このような貴重な史料に触れる機会そのものを与えられたこと、その史料を何の知識も持たない状態から紐解いていく作業をしたこと。紐解くという過程を通じて、歴史的背景と房良さんの人生を重ね、その切り口から新たな気づきを得るという体験は、「学び」のありかたを根本的に見つめ直すきっかけでもあったと思います。自分がこれまで書物によって知った戦争に関する知識は、その書物の著者が調べ上げたことを間接的に、あるいは受動的に受け入れ、読者である私が取捨選択しているにすぎませんでした。(中略) 現在当たり前と考えている日本史の知識も、元はといえばこうして史料を読み解き、遺跡を発掘することによって少しずつ明らかにされてきたものです。今回

の展示はそういったゼロからの根本的学びだったのでないかと思つています。また、そのような学びから「学び」の無限性や喜び、重要性を発見することができました。

生徒は、実物資料を通してさまざまに考え、多くの気づきがあったようである。それはまた、「学び」のあるべき姿への気づきでもあり、これらの思索や気付きこそが学習の成果であったといえる。実物資料は、教科書などのテキストと違って、そこからさまざま読み取りができ、考えることができる。どのように見たり考えたりするのか、皆で議論ができる。戦争を実感させるばかりでなく、思索を深めてくれるたいへん有効な教材であろうと考えている。

おわりに―授業を終えて―

本年度の「昭和史」の学習を終えるにあたり、生徒に感想を書いてもらったので、いくつかを抄出し「おわりに」にかえる。

- ・昭和史の授業を通し：私自身の「ものごとの考え方」を学んだ。
- ・自分の考えをより深く持てるようになった。
- ・軍事・行政・思想・宗教的なアプローチは新鮮でした。歴史認識：の難しさを実感するきっかけになりました。こんなに引き込まれるとは思いませんでした。
- ・意見を活発に交換し合うことができたのはとても刺激的でした。
- ・様々な戦争の見方を学ぶことができ、私の大きな財産になった。
- ・昭和という一つの時代の全体像をようやくつかめてきたかなと感じています。：今まで知らなかった知識や考え方に接することができ、本当に勉強になる授業でした。